

この一件は、実堯自ら白浜城へ赴き、里見義通に報された。

里見義通は、近頃、足腰が弱ってきた。

隠居してからは、どうにも身体がいうことを利かない。

「大殿、まずは小弓公方からの一件にござれば、ここは陣代として某が」

と、里見実堯が進み出た。

「そうも参るまい。本来なら当主が出陣せねばならぬ。しかし、太郎は意地でも発つまいよ。

ともなれば、その陣代は、どうやらこの隠居者にしか務まるまい」

「いや、それは」

「いまここで里見家が脆弱であると勘潜られる、極めて不都合である」

「ですが」

「小弓公方が里見を軽視すれば、ここを攻めるよう真里谷に命じるだろう」

義通の想いを受け止めた実堯は、戦場での子細を請け負う覚悟を定めた。義通は対局を定める総大将であればよい。

そんな実堯の心根が、義通は嬉しかった。

千葉攻めの軍議は白浜城で行われ、義豊を除く奉行衆が参集した。義豊こそ率先すべきところを、意固地になっているのである。これでは当主として覚束ない。しかし、そのことに義通は触れなかった。

野島崎から駆け上がる風は強い。季節風にしては、少々荒かった。今宵は風雨が強いかも知れない。

「手短に済ませよう。天気が荒れば、皆も気を揉むだろう。亭主をこの城に閉じこめて、家にも帰さぬと知れば、皆の女房どもから叱られてしまうからもう」

義通の前置きに、奉行衆は笑った。

「小弓公方からは、千葉介の本城である佐倉を攻めろとの仰せである」

いきなりの主題だが、一同は呻きもせず受け止めた。皆々、胆力は太い。

「安房から佐倉を直接突くのは、かなり困難で

あるが、それを容易と為す術から、先ずは話し合いたい」

義通に次いで、実堯が図面を示した。

「これまでも佐倉攻めを、真里谷勢が散々と行っている。これがうまく運ばないゆえ、当家にそのお鉢が回ってきたのだろう。この難儀、庁南勢が横槍を突いてくるためと推察する」

じつと図面を眺めながら

「さりとて庁南三河守（宗信）も、同族のよしみで真里谷に手心を加えた邪魔をしていたのだろうな。これが里見相手なら、相手も、些かの加減はあるまいて」

正木通綱はぼそりと呟いた。

「結局、小弓公方は同族同士の馴れ合いを不服に思っておる由。それで里見を試そうというのだろうよ」

義通の言葉に、奉行衆は呻いた。

「当家がこのことに役立たぬと、公方が気取ることこそ危うい。世上には、里見が強いと思わせねばならぬ」

実堯の言葉には一理あった。

義通はじつと腕を組むと、程なく顔を上げた。

「左京亮、一働きをして貰いたい」

義通は岡本左京亮通輔を近くへ招くと、図面を指し示しながら、海路から亥鼻城を攻撃するよう申し伝えた。

「これはな、実際に攻めはしない。そう見せかけるだけでよい」

「それが、佐倉攻めと、どのように？」

「まあ、急くな。そう見せることで、千葉介は動揺する。このときまで本隊は佐倉に接近すればいい。左京亮は陽動じゃ」

義通は図面を示した。

亥鼻城は都川河口低地の左岸に存在する。北総台地から亥の方角に突き出した舌状台地であり、千葉氏が佐倉へ移転するまでは、かつての本拠だった城だ。

「しかし地の利は損なわれておらぬ。もし才ある者が千葉方にいたのなら、必ず亥鼻城に気を取られよう。いや、そうでなければいかぬのだ。

よつて、左京亮は派手に暴れてよい。ただし敵
がきたら、城を捨てて海へ逃れるのじゃ」

死守不用と、義通は強調した。

「敵が兵を退いたら再び上陸し、寄せたら海へ
退く。こうすることで、敵の兵力を釘つけにで
きよう」

義通の言葉に、岡本通輔は頷いた。

「もしも攻め手がなかったら」

岡本通輔は質した。

「そのときは遠慮なく城を修繕すればよい。相
手がくれるというのだ、有難く我らが頂戴すれ
ばいい」

そして、義通は凶面を指した。

「亥鼻城の混沌を気取ったら、本隊はその虚を
突いて一気に本佐倉へと迫るのじゃ。しかし、
本佐倉城は落とさずともよい」

「大殿、それでは真理谷と変わりますまい」

「いや、代わりに出城を潰す」

「出城を？」

奉行衆はその真意が未だ掴めない。

凶面に示される佐倉の出城は、向根古屋をは
じめとする砦が数基。これは里見の兵力なら十
分に対応できる。

「でも、なぜ？」

岡本通輔の疑問に、義通は咳払いした。

「背後を絶たれる懸念を拭うためよ」

「ほう」

「軍勢はそののち和良比堀込城に入城すればよ
い。ここで機を見て帰国する」

成る程と、里見実堯は手を叩いた。

「ここで落城させないことで、真理谷に恩を売
れるのだ。」

名譽挽回の道を示すこと。

千葉攻めの機を譲られたことは、真里谷に大
きな貸しとなる。このちも真理谷は里見に
頭が上がらなくなる。小癩な真似に、小弓公方
義明もほくそ笑むに相違ない。

「ただ戦果を示して、忠節を示してもらえばそ
れでいい。逸見入道（祥仙）もそう云った。の
う、相違ないな？」

「たしかに」

実堯は頷いた。

義通の策に一同は同意した。

このためには、和良比堀込城への入城を含め
て、事前にこの策を足利義明に報せる必要があ
った。ちよつとした腹芸のような外交である。

こういう根回しを、義豊は未だ知らない。

「されば」

小弓城へは里見実堯が赴くことで軍議がまと
まった。

十十十

下総の風（3）

夢酔 藤山